

持続型地域社会の構築に向けた上林地域ビジョン  
ー野々市市南部上林地域 2050年のありたい未来像ー

2021年3月

上林町内会

上林生産組合

## はじめに

野々市市上林には、弥生時代と奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀前半）の遺構といわれる上林遺跡や林郷八幡神社があり、かつては、一円の地域を上林郷と称された時代もあったとされています。

その林郷八幡神社の来歴は、往古、拝師明神または拝師八幡宮と称し、長和2年(1013年)4月の創立と伝えられています。延文5年(1359年)従五位下を授けられ、守護富樫家では歴代守護神として崇敬、また地頭大桑玄猷、土豪林家、三林家をはじめ村民たちからは、総社として深く尊信されました。そのことを象徴するかのように、境内には樹齢千年以上の椎の木の大木などがあります。

現在では、上林町内の東側が野々市南部土地区画整理事業により開発が進み、四丁目に戸建約150世帯、借家・アパート約200世帯が居住しています。また、地域南部には加賀と能登をつなぐ金沢外環状道路としての加賀産業開発道路を多くの人たちが利用しています。一方、二丁目三丁目の旧集落においては高齢化が著しく、限界集落化が顕著に現れています。

2020年野々市市は、人口約5万5千人を擁する街となり、市の推計では、2035年には人口6万人のピークを迎え、その後人口減少が始まると言われています。野々市市の北部、北西部、東部地区は既に土地区画整理事業が整備され、住みやすい街づくりが形成されています。

一方、上林地区の二丁目三丁目の西部緑地は、市街化調整区域で農業振興区域として旧来の明治・大正初期に実施された耕地整理による7aの小圃場となったままです。

上林地区として、2035年をピークとした野々市市の人口動態を踏まえ、私たちの地域の未来像やコミュニティのあり方を考え、上林地域ビジョンとして提案すべきことが肝要です。

このようなことから、上林地域住民自らが『持続型地域社会の構築に向けた上林地域ビジョン』－野々市市南部上林地域 2050年のありたい未来像－というビジョンを描き、地域全体はもとより周辺地域との調和の在り方を検討し、持続的で最適な調和（サステナブル・ベストミックス）がとれた地域の提案を致します。

令和3年3月

上林町内会長 赤祖父邦雄

上林生産組合長 吉本勇治

## 1. 地勢

上林地区は歴史的な背景と加賀扇状地の肥沃な農地・豊かな手取川七ヶ用水系の水によって集落が発展してきました。手取川扇状地で頑強な地盤に支えられ、一定の傾斜もある排水良好な地勢です。高度経済成長期までは、その豊かな資源を活用した農業生産が実施され、水稻、水田畑作、水田養豚、水稻裏作などが盛んに行われました。近年は、農業の兼業化が進むとともに専業農家への農地集積も進みました。各農家が農地を耕し、そこから得られた豊富な農産物で生計を立てる時代から、農業外収入による農家収入の向上が図られるようになってきました。

また、上林四丁目は商業地・住宅地としての開発が進み、五丁目は準工業地帯として発展を遂げました。加賀産業開発道路（金沢外環状道路）などの交通網とともに、街並みが整備されてきています。商業施設等も充足されて、日常生活に不便をきたすことはありません。まさに、豊かな都市近郊農村地域となりました。



上林地区の概要地図（Google より引用）

## 2. 地域の理念

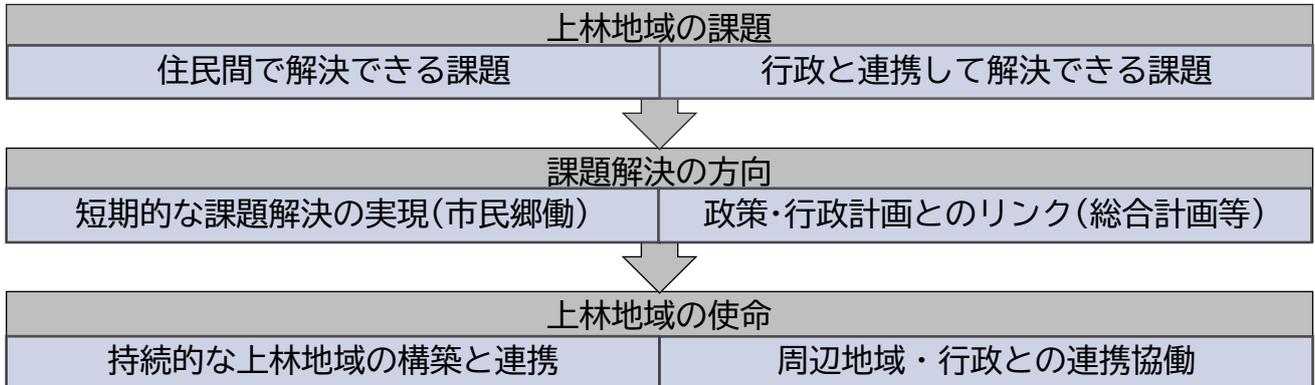
現在では、新型コロナウイルス感染症による社会の構造変容や通信販売等の消費形態等の変化、高齢化少子化の加速や消費の多様化などが顕著になっています。しかしながら、必ずしも今の状況や環境が10年20年後、そのまま継続されるとは限らない不透明な状況です。

私たちは、地域がある程度活況を維持しているうちに、地域の未来像を議論し、将来の人たちに地域のありたい姿を示し、未来像を描くことが重要であると考えました。将来の地域活性化の理念を持ち、持続的な地域コミュニティをいかに発展させるかを考えなければなりません。それは、地域住民が一体となった豊かな地域理念を創造し、将来の若い世代に夢と希望を語っていくことだと思えます。

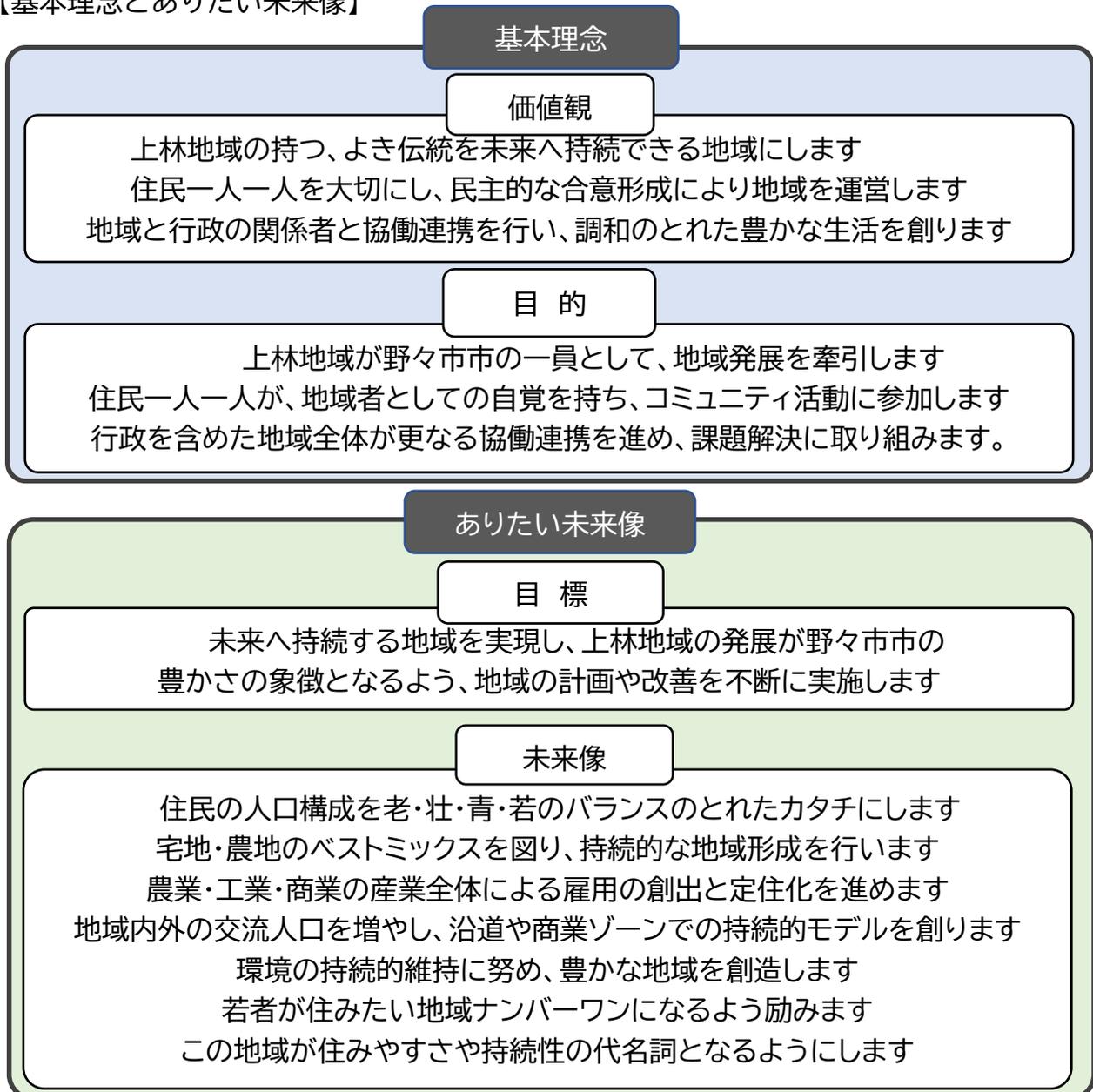
そこで、野々市市が進める市民協働の考え方とマッチングした地域住民主体の自律型の協働が必要であると考えます。

### 3. 上林地域ビジョン

#### 【課題解決】



#### 【基本理念とありたい未来像】



## 4. 持続可能な地域づくり

〈家庭⇔地域〉や〈経済⇔環境〉を〔対立軸〕でとらえるのではなく、発展や成長がゆるやかなるような社会形成として、〈家庭+地域〉+〈経済+環境〉=〈持続型モデル〉を構築する方向の〔共生軸〕の考え方で現状と課題を検討しました。

また、地域の融和が進むこの地域では、地域内における個人間の信頼関係の基礎となり、安心して住むことができ、豊かさを享受できる状況の背景と課題について整理しました。

### (1) 生活の豊かさ

#### ① 教育

幼稚園は、青竜第二幼稚園が地域内に立地しており、幼児・小中高校・大学大学院の教育施設が周辺に充実するとともに、金沢工業大学には放送大学等の拠点もあり、社会人教育の体制も整っています。また、近接する石川県立大学には、食品や農業、環境分野の教育が充実しています。高齢化社会を迎え、社会人や高齢者のリカレント教育の充実もますます必要となっていくます。

また、校下である富陽小学校がマンモス校となり、今後も学童の増加が予想され教室定員の見直し等が行われることや、当地域が、比較的遠隔な地域にあることから、学区編成の見直し等が必要となっています。

#### ② 福祉医療

地域内には医院等があり、近隣には総合病院や介護施設があり、救急体制が充実しています。今後も、医療や介護体制の充実は、重要な役割を担うこととされます。地域として、周辺の福祉医療体制の充実には十分注視しておく必要があります。

#### ③ 交流住居

現在は、3世代居住から、2世代や1世代居住となり、分散居住が一般的になりました。これにより、家族間や世代間の交流が減少しました。地域の歴史や文化の伝承が希薄になっており、農村の歴史や価値観の伝承や交流の必要性が高まっています。

### (2) 経済の豊かさ

#### ① 就労と雇用

就労先としては、地元野々市市や金沢市、白山市など十分な就労先があります。また、大企業から中小企業まで、比較的サービス業を中心とした業種が多いことも特徴です。上林地区にも、五丁目には食品製造業者等もあり、四丁目には商業施設が立地しています。しかしながら、地域の農業や人材を生かした事業所は少なく、職住近接の就労先の立地が求められます。

#### ② 食農

農業としては米の生産が主となっており、畑作としての青かぶら、キウイフルーツ、花蓮、ヤーコンなどが上林地区で生産されています。また、家庭菜園も自給用で耕作されており、食農近接の豊かな場所が提供されています。しかしながら、米の価格低迷で、水稻生産は多くが中心的経営体が担っています。今後は、収益性と集約性の高い農業によって、この豊かな農地の利用を発展させることが大きな課題です。

### (3) 環境の豊かさ

#### ① 農地と水と地域

1・2・3 丁目を中心とした南西地域には、豊かな水田が広がっており、手取川七ヶ用水土地改良区が管理する富樫用水や郷用水から、豊富な水量の用水が流れ込み、この農地に十分な水量を提供しています。近年は、上流地域や上林地区の下水道整備もあり、水質は格段に向上してきています。

これらの水田は、明治末期から大正初期にかけて、日本で草分け的な耕地整理事業（石川式耕地整理：石川式は明治 20 年に石川県野々市村の模範農場（現在の住吉町にあった農事舎）で始められた工法）によって整備されました。給水路・排水路が分けられており、農道もほぼ全ての農地に接続できるようになっています。農地の表土も歴史的に人力等で整備され、良質な表土層となっていて、耕地整理事業の恩恵が今でも生かされています。

また、水稲においては、すでに多くの農家が基準の農薬成分の半減程度以上の減農薬栽培や減化学肥料栽培を実施しており、環境に配慮した農業生産が行われています。

#### ② ゆとりある空間

農地が広く、水稲などの栽培が行われていることは、地域環境の涵養（かんよう）という点からは重要な役割を果たしており、清々しく住みよい地域となっています。この緑ある空間によって、地域の住環境が大きな豊かさを享受していることはいまでもありません。また、人口減少社会において、過剰な住宅供給にも限界があることから、このゆとりある空間を生かした地域づくりが重要だと考えます。

### (4) 安全と自治

#### ① 防災治安

自警団や婦人防火クラブ、自主防災組織など、自治防災や治安組織の活動によって、地域の安全意識を高める取組を行ってきています。引き続き、このような地域活動を持続させてゆくためには、若年層の人口増加を図ることが重要です。特に、2 丁目 3 丁目地域の若年層の減少が顕著で、このままでは、集落機能や見守り機能が維持できなくなります。一定数の人口増加定住策が喫緊の課題となっています。

#### ② 交通安全

道路整備は、かなり進んだというものの、都市計画道路の堀内富光寺線の狭さく状態の解消は行われておらず、死亡事故等の発生も多く、安全対策が喫緊の課題です。また、四丁目の通学道路の横断歩道の安全対策等も急がれます。三丁目地内等の商業施設へアクセスする市道の狭さくも課題です。

#### ③ 地域活動

上林地区では、町内会、生産組合の合議体や様々な活動組織があり、極めて民主的にその運営が執り行われています。法的な地方公共団体の野々市市の配下にありながら、自主的に取り組む活動や共同して行う活動を積極的に行っています。しかしながら、地域づくりには、限界もあり、野々市市と連携した共助や市の支援も重要になっています。特に、今回提案の上林地域ビジョンにおいては、野々市市の支援と連携の必要性が不可欠となっています。

## ◇地域発展の基本的な考え方◇

歴史ある上林地区は、農地・環境・水・人・文化・交流・交通等の豊富な資源の上に、安全で安心な暮らしを実現してきました。それらの資源は、農地から生まれたものといっても過言ではありません。したがって、この地域の持続的な発展は、この恵まれた農地の維持が中心です。そこで、農地と農村文化を維持しつつ、地域発展の為に解決すべき課題を明らかにし、施策を講ずることが重要だと考えます。

## ◇地域の具体的な課題◇

- ① 農振地域としての上林地区は、明治大正時代の耕地整理が基盤となっており、他の地域よりも農地の大規模化が遅れ、小さな圃場のままとなっております。地域住民へは、緑あふれる自然環境の提供・地元で生産される農産物の提供をしてきました。このような環境配慮型の付加価値化により、農地の環境維持を行っていく必要があります。
- ② 近年、上林二丁目三丁目は限界集落化が著しく、地域活動が維持できなくなりつつあります。このような高齢化と過疎化を早急に防がなければなりません。地域活動の維持には、老・壮・青・若のバランスのとれた人口構造にする必要があります。
- ③ 加賀産業開発道路は、産業道路としての機能と金沢都市圏の外環道としての役割を果たし、商業施設へのアクセスや、生活道路としての機能も有しています。これらの機能を地域として、地域課題への貢献へ最大限生かすことが重要であると考えます。また、堀内富光寺線の都市計画道路の狭さく状態の解消も求められます。

## ◇地域発展の具体的な施策◇

- ① 農振地域について
  - ・農振地域は農地を維持し農業生産の振興を行うために、圃場区画再整備を行うことにより、自然環境と地域住民の生活の豊かさをもたらすような先進的なモデルを構築し、収益性の高い農業の実現と環境配慮型の持続的地域発展が必要です。国が進めているカーボンニュートラルに呼応したみどりの食料システム戦略(※)等の導入も検討する必要があります。 ※みどりの食料システム戦略 <https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/team1.html>
  - ・そのためには、地積を現状のままとし、低コストの水路・農道改修、水田の畦倒し等の整備が急務です。 ※畦倒しとは、圃場の地積を現状とし畦を取り除いて利用する圃場の区画を拡大するものです。
- ② 集落周辺について
  - ・上林二丁目三丁目の集落周辺に集落機能の維持を進めるために、定住用住宅地を開発し、定住化を促進する必要があります。
  - ・また、職住接近型を基本とした地域の農産物を原料等にした食品加工業などを誘致し、創業支援と地域循環を持続的に進める必要があります。
- ③ 幹線道路について
  - ・幹線道路である加賀産業開発道路周辺での沿道サービス化によって関係人口の創出が可能な絶好の場であり、農業や地域産業等を持続的に展開できるためのゾーンとして開発し、野々市市全体の地域発展のための資源にする必要があります。
  - ・また、狭さく状態にある堀内富光寺線の早期整備とその道路沿いの整備を進め、集落周辺との一体的な整備の必要があります。

## おわりに

上林地区は、野々市市の南部に位置し、今後とも、野々市市の地勢的にも重要な地域の一つであることには変わりはなく、住民や地域が豊かであり続けることが求められています。

野々市市が今以上に住みやすい街になり、上林地区においても、その恩恵を享受しつつ、自立した地域活動を主体的に行えるコミュニティ活動が持続的に発展していく必要があります。

このような持続発展的な地域のあり方は、住民や住環境、教育や福祉等にも大きなプラスの影響を及ぼすと考えられます。住民が、主体的に自立型の地域運営を高め、常に地域のあり方について協議し、共有し、野々市市と一体となる取り組みを推進していく必要があります。

この上林地域ビジョンが上林地区はもとより、ひいては野々市南部地域のみならず野々市市全体の持続的発展の一助となれば幸いです。

なお、本ビジョン実現のためには、野々市市当局等の関係者の皆様と定期的に意見交換の場を設けさせて頂きたいと考えておりますので、何卒よろしくお願い致します。